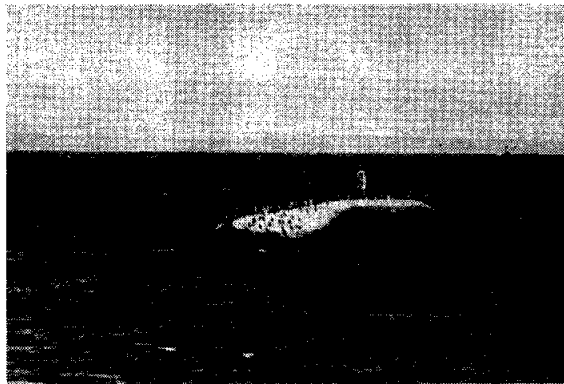


南米最南端の地 フェゴ島の人と自然

プンタ・アレーナスにて

チリのプエルト・モントから約千キロの行程を、およそ一週間かけて大陸最南端の港プンタ・アレーナスに投錨したナパリーノ号から降りたったのは、一九七七年一月二十六日早朝だった。盛夏を迎えるというのに空気は冷たく、折りからの雨で身震いしながら、私たち（私のほかに日本を発ちウスタイアまで一緒だったTさんと偶然チリのプエルト・モントで出会い、やはりウ

スタイアまで行動をとりにした日本人の三人の若者。彼らはメキシコでの留学生生活を終えて中、南米の旅を楽しんでいた）は、町はずれのフェゴ島と大陸を連絡するフェリーの発着場へと足を急いだ。目の前のマゼラン海峡は依然として鉛色の雲が低くのしかかり、白い波頭を見せていた。その後方には、青くかすんだ大地がどつしりと横たわっていた。それは、幼少の



マゼラン海峡に難破した貨物船、
船腹にウミウの群れが憩う。

博 殿 城

頃ダーウィン著「ビーグル号航海記」を読んで以来、私の脳裡から離れることのないフェゴ島である。

フェゴ島 フェゴ島はマゼラン海峡以南に数多くある島々のなかでは最大である。古くは Ona, Haush, Yaghan, Acauluf の四部族から成る先住民が狩猟生活していたが、新大陸発見以後のヨーロッパ人の持

ち込んだ病気によって絶滅したといわれる。現在この島は中央から南北に国境が走り、チリとアルゼンチンに領有されている。主産業は牧畜で島全体が牧場となっており、羊のほか少数の牛馬が放牧されている。最近、石油が採掘され新たに町が作られたり、観光地として脚光をあびるようになったりして人口は増加傾向にあるが、いまだ二万人程度で人口密度が著しく低い。

マゼラン海峡を渡る

大航海者マゼランの率いる一行が、年中波の荒いこの海峡を無事渡りぬけるのにはよほどの苦勞を必要としたであろう。後に数多くの船が同じ試みにいどんで、座礁の憂き目に遭った。いまなおこの海域に、やたらに目につく船の墓場はそれを物語る。航海術の発達した現在も、なお難破があるとたたないという。どうも潮位の差が大きいのと、海底が複雑なことにその原因があるようだ。プンタ・アレーナスまでの航海中にも航路の各所に「船の墓場」を見た。さいわいプンタ・アレーナスとフェゴ島を結ぶ航路には難所は少ないということ、フェリーの舵をとるセニョールはいったって無造作な手つきだったが、フェゴ島が接近しだす頃になると表情にも緊張がはじめられた。ふと視線を海上に向けると、二百メー

トルほど前方に腹を横にして難波した貨物船が一つ目に入った。腹の白いウミウの群れが羽根を休める格好の場所に、ここを占拠していた。フェリーは高波を切りながら次第に彼らに近づいて行き、ついに目と鼻の先までくると、ウミウたちは次々に上空に舞上がっていくが、われわれが遠ざかってしまうと、また元の場所まで直立姿勢で海上を見つめていた。

二時間余りの航海も終わりに近づき終点のボルベニール港にさしかかる寸前、船の横にびったりついて十頭ほどのイルカの群れが空中を跳びはねていた。すかさず乗客から歓声がわきあがり、私はあわててその方角にカメラを向けるが、一瞬のタイミングをつかむのは至難の業で、それでは見当をつけてというところでカメラをイルカの現われそうな場所に固定して待機すると、肝心の彼らが恥づかしくがってばったり姿を見せなくなってしまう。ついさっきまで元気よく船と競い合っていたイルカ談義に夢中になつていっているうちに、われらがカメリンカ丸は港に横づけした。帰路には羊毛を山積みしてくるはずの大型トラックが次々と威勢よく船からとび出して、土埃をあげて道を疾駆していった。ついに、われわれはフエゴ島に最初の一步を踏み入れた。

ボルベニールから南端の町 ウスアイアまでのバス旅行

ボルベニールはチリ側フエゴ島最大の町で、人口約三千六百。その七〇％は、ユーゴスラビア系の白人で占められている。島の主要な産物である羊皮は、この町を経てプンタ・アレナスに集結される。ごたぶんにもれず町の中心にはブラサ（広場）があり、それを教会や町の主な建物がとり囲む。明るい中間色の建物は他所でも普通に見かけたがその大半がトタン張りだった。絶えず吹きすさぶ風に対処した建物なのだろうである。

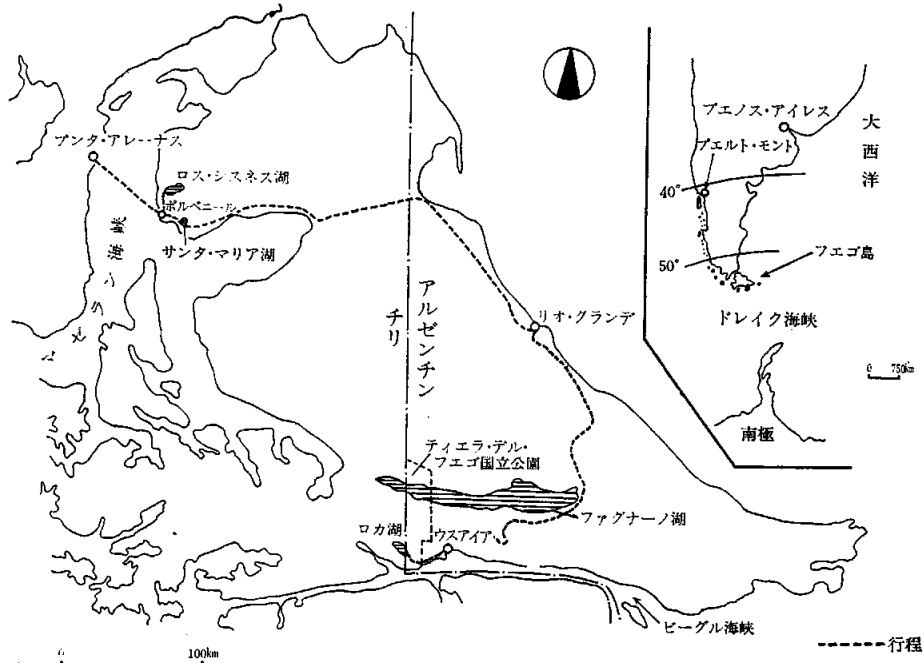
一夜明けた一月二十七日の昼近く、十カ国あまりの国籍の外国人観光客をのけたバスは、昨日とはうって変わって澄みわたったボルベニールの町を後にして、東へ東へと砂煙をけたてて走りはじめた。百キロ地点ぐらいまでは、海岸と平行して道は伸びていた。はじめの少し起伏のある丘陵地帯の広葉樹林を除けば、草地と低灌木の平原がつづく。ときどき道路わきに牧場の名を記した標札が見えるが、人家はめったに現われぬ。海岸から遠ざかり、内陸部に向かうにつれて景観もますます開放的になって草地が多くなる。羊の群れが路を横切っている最中に出くわし、そのたびにバスは

止められ、全部渡り終わるまで待つことも何度かあった。どうやらいまは羊の毛を刈取る時期らしく、馬に乗ったガウチョが数人組みになって、見渡す限りのだだっ広い草原に散らばった羊たちを手際よく集めてきては、作業場にある狭い囲いに誘導しては追い込んでいた。群れからはみ出た羊を発見するやいなや、ガウチョのかたわらに忠実に従っていた牧羊犬が跳び出て、はぐれ羊を元の群れに入れようと必死にはえてる。囲いに収容された房々した毛で丸々とした羊は一頭ずつガウチョの手に持つ大きなハサミで、見る見るうちに外套を剥がれ、たちまちにして細身の姿に変貌してしまふ。用済みの羊は、一頭ずつ真っ赤なベロンキを塗りたくられ放たれる。こうして赤い羊が草をはむ光景が、方々の牧野で観察された。

ボルベニールの町を出ること約四時間半、行程にして約一五〇キロでわれわれは国境を目前にした。ここにいるまでの十数キロは、中央高原の広大な草原が見渡す限り広がっている。注意深く周囲に目をやると、大小とり混ぜて二十を越す浅い水溜りが白く浮き出て見える。こんなところは水鳥が憩う場所には格好らしく、シギなどの小型種からハクチョウやフラミンゴなどの大型種にいたるまでの、種々雑多な数多

くの鳥を誘因する。バスの中からは遠くまで小さな種類は黒い豆粒ほどにしか見えぬが、体は白くて頸だけ黒い白鳥（クロエリハクチョウ）は離れていてもすぐそれと判る。また大きな水溜りには、フラミンゴの大群にもめぐり会える。このフラミンゴは、日本の動物園で普通見かけるのより体がずっと小ぶりで薄紅色をしている。車窓から発見した群れはざっと見積っても二千羽はいらるだろうか、水溜りが彼らで埋めつくされてしまっていた。このフエゴ島では、フラミンゴはこの中央高地でだけ繁殖する夏鳥だが、積雪のある冬場は山を下りて海岸の湖や内湾、時にはパタゴニア地方へ移動する。

バスの中から馬たちの楽園をしばし鑑賞するうちに国境に到着した。団体客優先と気のよいチリ側の国家警察の小意気な計らいで、手続きに手間どることなく出国、アルゼンチン領に踏み入れた。自動小銃を小脇にかかえた兵士の姿を横目で見ると、大國手続きを済ませたわれわれは、左手に大西洋、右手に牧野をながめながら旅をつづけた。フエゴ島第一のリオ・グランデの町に乗り入れたのは、夜のとぼりがすっかり下りて、人気がまばらな深夜であった。明るく早朝、格子状に区画整理されたこの町をゆっくり見る間もなく、バスは牧場



フエゴ島の概念図

地帯を砂煙を巻き上げて突っ走った。草の青々と茂った場所には、必ずといって良いほど、何種類もの *Caucayan* (ガンの仲間) が群らがつて草を食んでいた。この種の鳥類はこの島の放牧地にごく普通に分布しており、しばしば大群となって現われ、伸び盛りの牧草類に集中攻撃をあげせ、時には無視できない被害を与える。そのため、牧場によっては銃による駆除をしなければならぬほど事態が深刻なところもあり、そんな牧区には射殺されて後も晒されたまま白骨化した死体が数多く散乱していた。

リオ・グランデから約五十キロも車を走らせると、それまで海岸沿いに伸びていた道も徐々に内陸へと方向転換する。それにつれて植生も一変して、木本類が目立つようになつた。この辺の樹という樹は、大西洋からの強風をまともに受けて枝は風下に押し曲げられ、複雑な形を強いられていく。また枝々にサルオガセに似た地衣類がびっしり寄生して、不気味な光景を醸し出している。この林をぬける頃から標高が次第に上昇し、樹々も多くが常緑樹である。登りつめて一まず平坦になつたところでファグナーノ湖の雄大な眺望が開ける。この湖は長径百キロ、面積五四五平方キロ(琵琶湖六七四平方キロ)の東西に細長い淡水湖である。この湖周辺には大小様々な湖沼

が数多く分布して、互いに川で連絡している。ファグナーノ湖の湖岸沿いに走って湖から次第に遠のく頃から勾配が急にけわしくなりはじめ、やがて峠にさしかかるあたりからパノラマが展開し、いま来た方面の景色が一望の下に見渡せる。だがこのせつかくの眺めも無造作に道路脇に寄せられた土砂のために、周辺から次第に内部にまで枯死した死の世界に相殺されてしまう。

峠を越え、山麓近くまで残雪のあるマールシャル山群をおおききながら溪流に沿って蛇行する道を下りはじめると、ポルベニールからの急ぎ足のバス旅行(四八〇キロ余り、二日間)の終結も間近い。山間から突如、ビーグル海峡を望む頃にはウスアイアの町もすぐそこにある。

世界最南端の町「ウスアイア」

チリのブエルト・モントを二月二十日に発つて以来波にもまれたり、バスを乗り継いでこの強行軍などで、ここはひとまず休養をということになり、しばらくこの町に滞在することになった。

ウスアイアは背後に夏なお残雪を冠った山脈を控え、大型船の停泊が可能水深のあるビーグル海峡に連絡した湾に面する世界最南端の町である。人口は、約五千六百八〇人。その八〇%以上が海軍、政府、林務関

保の公職に従事し、大半の人々が二つ以上の仕事を兼ねている。

最近、大型客船がこの地に夏訪れる観光客が増え、観光の町として脚光を浴びているが、それにもまして南極行きまたは帰りの観光船が寄港する港として有名である。これらの船は食糧や燃料の補給のため数日間停泊し、その間観光客は周辺をバスツアーに出かける。

この町から南極大陸まではわずか千キロあまりだが、猛り狂うドレイク海峡を無事通りぬけるには、それなりの設備と規模を備えた船でなければならぬ。そんなわけでの地に向う船はいずれも立派な代物だからである。

地球最後の聖域といわれる南極も、金さえあれば何なく行けるところとなってしまう。滞在期間中二度、南極から帰ったばかりの船を見る機会があったが、下船してきたのは年寄りばかりであった。

ティエラ・デル・フエゴ国立公園へ

ウスアエアから西へ約一〇キロ、常緑ブナの青々とした木立の中を車を走らせると太い丸木の門がまえのティエラ・デル・フエゴ国立公園入口にさしかかる。海岸、湖沼、山岳地帯を含んだ、この島で唯一の国立公園で、総面積が六万三千ヘクタールあ

る。

私たちは、一月三十日から二月六日までの八日間、何かと生活費の高つく町のホテル暮しに見切りをつけて、この国立公園でキャンプ生活に突入した。とはいえ、プエルト・モンテから一緒になった若者達は気軽な身なりで、およそ野営向きでない。私が所有するテントはいくら押し込んでも大人四人が限度、あれこれ考えたあげく、ビニールシートをテントがわりにして、余った一人がこれで眠ることで一応おさまりがついた。

一月三十日の夕方、ホテルのライトバンに便乗して公園に乗り込んだわれわれは、さっそくロカ湖の湖畔に、テントを設営した。作業を終わると間もなく公園監督官が現われ、キャンプ場の使用料を徴収してきた。一人一日、三百円也。ただとばかり思っていたのでいささか気落ちしているところに、釣りをするなら入漁料もと、すかさず第二のパンチ。しかしその後には何かと余得を受けることになった。一日三百円払えば、熱い湯がふんだんに出るシャワーを浴びることができ、いま考えても理解できないことだが、町の半分以下の値で町から離れた山の中で食糧品が手に入った。また十日間有効の釣りのライセンス

を六百円払って入取した結果、ほとんど毎食マスを賞味することができた。

この国立公園に来訪する顔ぶれを見るとわれわれと同じ外国人のバックパッカーと長期の休暇を十分満喫するために、世帯道具をどっさりキャンピングカーに積み込んでやってきた地元組である。前者が毎日の献立を気にしながらつつまじやかなのに対し、後者は毎日豪華なステーキと、食事の内容にも極端な隔たりがある。食事のたびにステーキの匂いがかがされ、何度食指を動かされたことか。

八日間のキャンプ生活が食べることのみに執着していたことは、いま当時の記憶をいくら絞りに出してもほかのことが見当らないことから明白である。なんとも浅ましい限りである。

白鳥の湖を訪ねて

きなかつたフエゴ島の鳥たちに見えるために、徒歩とヒッチハイクを交えながらゆくり北上することになった。

国立公園でのキャンプ生活のあとウスアエアに再び引き返したわれわれは、ここで別れることになった。日本を発つ時からほとんど行動をともしたTさんは急遽、北上してアマゾン河中流の町マナウスへ、チリのプエルト・モンテで偶然遭遇して以来一緒だった日本人の三人の若者はプエノス・アイレスへとおのおのの旅立っていった。私だけは、いままでゆっくり見ることのできなかつたフエゴ島の鳥たちに見えるために、徒歩とヒッチハイクを交えながらゆくり北上することになった。

日本を離れる前から、フエゴ島やパタゴニア地方の湖沼や内湾に生息するといわれる、頭から上がまっ黒なクロエリハクチョウと、つい最近ハクチョウの仲間入りしたばかりのカモハクチョウの二種類の鳥には強い関心を抱いていたので、ぜひとも面会したいものだと考えていた。そんなことから目に入る湖沼や河川、海岸には特別注意を払って眺めたが、いざ目当ての鳥を見たい段になるとなかなか姿を現わしてくれない。結局、アルゼンチン側では、観察の機会もないまま国境を越えてしまった。気がぬけて道わきで休んでいると、遠方から土埃をモクモクあげながら近づいてくる、羊皮を荷台いっぱい積んだ大型トラックを発見した。運よくそれに乗って砂利道を揺られること数時間、車の振動が心地よい眠気を誘いウトウトしていると、ポルベニールの手前約三〇キロの道路が海岸線と並行して伸びているあたりの周囲約五キロの楕円形の湖に、まぎれもない頭だけが黒いクロエリハクチョウの群れを発見した。あわててトラックを制止させ、げんそうな顔をした運転手に礼をいってから、さっそくお目当ての湖に足を急いだ。

湖には約三百羽のクロエリハクチョウの他にオオバン、カイツブリ類、カモ類が水浴びし、湖岸にはシギ・チドリが少数足早に採餌、草原ではガン類とトキの一種が群れていた。ここは野鳥にとつて恐れるものない憩いの場所のようだ。彼らの安穩な生活をかき乱すことに気をとめながらも、彼らをもっとよく見定めたいという衝動を抑えきれず、私は湖畔に居すわってしまつた。

野生のクロエリハクチョウを心ゆくまで観察できたおかげで、すっかり長居をしてみました。すでにフエゴ島での目的の一つをかなえた私は、この湖でついに見ることでできなかったカモハクチョウに会うべく再び移動を開始した。

二度目のボルベニール入りした私は、この町で水鳥の居そうな場所の情報を得ようと、宿の人々、漁師、役人などをつかまえては聞いて歩いた。これまで南米のあちこちでものを尋ねたとき、たとえ知らなくても何かいってやらねばという南米人の「やっかいな気質」に何度も翻弄されていた私は、いまだは場所のありかを聞くことにすこぶる慎重になっていた。その結果、町の北方十キロくらいのところに湖沼地帯があり、そこにはフラメンゴ（スペイン語でフラミンゴのことをこういう）や白鳥が生息

することを聞き及び、さっそくその方向に歩きはじめた。ほどなく後方から来たおそろしくポンコツのトラックを呼び止め、荷台に跳び乗った。なだらかな起伏の牧場地帯をけたたましいエンジン音を轟かすこと約十五分、牧棚に風が吹きつけて生じるヒューヒュー音が耳に残る、いかにも荒涼とした風景の中に横たわるロス・シネス湖（白鳥の湖）の湖畔に下り立った。一望したところでは、湖のどこにも水鳥の姿はない。塩分が析出して白く固まった湖岸をよみくもに歩いていると、ケリが一羽だけ強風に胸羽をおおられながら立ちすくんでいる場面に出くわした。三脚に固定したカメラを構え、ファインダーを覗くとケリの後方に、白い小さな点がいくつかぼんやりと浮かんで消えるではないか。この距離からでは白鳥かフラミンゴかどちらとも判別がつかない（旅の途中で双眼鏡をなくしてしまい、カメラについた四百ミリ望遠レンズをその代用に使っていたので）。直線コースなら三百メートルくらいのところだが、湖岸伝いに行くと五キロほどもある。はっきりさせたいという希望に、運ぶ足もついで速くなった。

最後の丘を越えるときにはさすがに胸が高鳴った。急いで前に体を投げ出して目前に見た白い鳥は「ラ・プラタの博物学者」

（W・Hハドソン）がいた頃は、アルゼンチン国フエノス・アイレス近郊にも普通に見かけられるほど沢山いたが、いまではパタゴニア南部とこのフエゴ島に少数が生息するといった馴じみの薄い鳥になってしまったカモハクチョウの群れだった。全部で八十一羽もいた。体の大きさはガン類とはほぼ同じくらいだが、首の長いところはまぎれもなく白鳥である。純白に近い体色に嘴の鮮やかなピンク色が強いアクセントとなっている。時おり、群れの中の一羽が嘴を空に真上に向けて *Cos-coroba, cos-coroba* と素つ頓狂な叫びをあげる。おかげでこの鳥の学名も英名もこの鳴声にちなんだものである。

まさかめぐり会えるとは想像だにしなかった（期待はしたが）カモハクチョウとの出合いの感動に、帰路歩いた十数キロの道のりも疲れを感じさせなかった。

再び海峡を渡る

一月二十六日にこのフエゴ島への第一歩を標してから、それこそこの島の上へ面しか見ることのできなかった急ぎ足の旅だったが、それでも一カ月近くが過ぎてしまった。そしていま、起点となったボルベニールはいまや終着点となり、私はここを去ろうとしている。来た時と同じ波の高いマゼ

ラン海峡をゆく船の上から次第に遠ざかるフエゴ島をふりむくたびに、私は呟く。
Adios Tierra del Fuego! Vuelvo por mis.

あとがき

ダーウィンやハドソンの著書を目にするたびに私の南米へ行きたいという欲望は高まるのですが、なかなか実現できませんでした。

幸い一昨年春より昨年の春までの一年近く各国を訪れる機会を得ました。なかでもフエゴ島は印象深く記憶に残っており、パタゴニアとともにその雄大さと、荒涼とした眺で終始圧倒され目がくらむほどのです。紙面ではその一部しか触れられないのが残念です。
（北大農学部応用動物学教室）

参考文献

- R. N. de Goodall. 1975. Tierra del Fuego. Ediciones Shanamaim.
- Automobil Club Argentina. 1976.
- Carta Turistica. No. 8. Tierra del Fuego Antartida e islas del Atlantico sur.
- The South American Handbook. 1976.
- Trade and Travel Publications Ltd.